



司会：佐々木 真理
(実践女子大学
文学部英文学科 教授)

「動く」女性 一日英米の女子教育と 服装改革の歴史

メイポールダンス、袴、自転車。下田歌子が自立自営しうる女性を育てるために欧米から採り入れたものの中で、これら3つのものは現在も受け継がれています。これらに象徴される女子教育の理念とは何か？この問いを出発点に、下田が海外視察で吸収し、日本で展開させた女子教育の理論と実践を、英米の女性解放運動（身体教育と服装改革）の歴史と照らし合わせながら振り返り、女子教育の未来を考える契機とします。



講演 19世紀アメリカの衣服改革 —健康増進と女性解放

アメリカ合衆国では19世紀半ば以降、女性の健康増進を目的として、コルセットを用いた伝統的服装から女性を解放しようとする「服装改革」が提唱されました。この改革運動の広がり「女性解放運動」「水治療」「徒手体操」「ユートピア運動」から解説しました。

■服装改革の広がり

—「女性解放運動」「水治療」「徒手体操」

19世紀半ばのアメリカ女性の服装は、きついコルセットに重いベティコートという身体に有害なものだったため、緩い膝丈の服を緩めのパンツの上に着るといった服装「ブルーマー」が登場しました。この名称は、この時期に女性解放運動で活躍したアメリア・ジェンクス・ブルーマーに由来します。彼女の女性解放運動の成果の一つが「服装改革」でした。この改革はイギリスにも波及したので、1893年に渡英した下田歌子が、この改革思想に間接的にでも触れたことは十分に考えられます。

「水治療」は、シレジアの医師ヴィンセント・プリースニッツにより体系化された医学療法で、1840年代にアメリカに伝わりました。身体の様々部分に水や温水を当て、その最中や後に布で体を摩擦する治療法で、従来の苦痛を伴う「逆症療法」に代わって普及しました。その特徴は、特に女性を対象として、生活改善による病気の「予防」に力点が置かれたことです。また、医師が男性に限られていた逆症療法とは対照的に、女性による治療を積極的に推奨しました。服装改革にも共鳴し、広がりました。

「徒手体操」は、同時期のドイツ式体育とは対照的な、比較的穏やかなスウェーデン式体操です。この体操を19世紀半ばの女子教育の中で生理学的見地から推進しようとしたのが、小説「アンクルトムの小屋」の著者のストウ夫人の実姉、教育家のキャサリン・ビーチャーでした。

■服装改革と結婚改革

メアリー・ゴーズ・ニコルズは、1840年代半ばから水治療の普及に尽力した女性ですが、自分の不幸な結婚を契機に結婚制度に批判的になり、「結婚改革」を提唱します。女性に「財産権」や「親権」がないこと、特に「性と生殖に関わる決定権」がないことを批判しました。女性は夫の欲望のままに出産を重ねなければならない、結婚生活は多くの女性の健康被害要因になってきたのです。やがてニコルズは結婚制度を否定する「フリー・ラヴ」思想へと傾倒していきます。

19世紀アメリカで設立されたユートピア的生活共同体の一つ「オナイダ・コミュニティ」は、フリー・ラヴ的な「複合結婚」という多重婚の制度を採用しました。この一見不道德に見える制度は、禁欲的な態度を男性に求めることにより女性の身体を守り、健康増進を目指しました。

このように服装改革と結婚改革は、アメリカにおけるフェミニズムの一環として、関連付けられるのです。



▲結婚改革にも踏み込んだ男性研究者ならではの視点で、興味深い事例が紹介されました。

講演 「合理服、スポーツ、自転車 —19世紀イギリスの女性解放運動

下田歌子が視察に訪れた19世紀末のイギリスでは、動きやすい服を着た女性たちがスポーツを楽しみ、自転車で自由に移動し始めていました。この現象の背景にある女性解放運動の理念と活動を振り返り、その意義を解説しました。

■イギリスの衣服改革

イギリスの衣服改革は目まぐるしいものでした。ヴィクトリア朝初期には「クリノリン・スカート」が流行し、1856年には「スケルトン・ベチコート」が考案されました。その全盛期にアメリカのブルーマーが渡英し、「ブルーマー・コスチューム」の着用キャンペーンを行いました。当時の人々に嘲笑されました。スカートの巨大化による数々の事故などが原因でクリノリン・スカートが衰退すると、1870年代にはコルセットをきつく締め上げる「タイト・レーシング」が流行しますが、これは頭痛や呼吸困難、血行不良など女性の健康に深刻な影響を与えました。

こうした女性の健康への懸念から衣服改革の重要性が唱えられ始め、1881年に「女性の健康を害する服に抗議する」という方針の合理服協会が設立されると、本格的な衣服改革が始まります。その理念を具体化した「ディヴァイデッド・スカート」は、軽くて動きやすい合理的な服でした。この合理服は一部の雑誌では賞賛されたものの、「女性の男性化現象である」としてブルーマー・コスチュームと同様に激しい議論を呼びましたが、後に女性の自転車用衣服として普及することになります。

■女子教育における体育・スポーツの導入と自転車

衣服改革を後押ししたのが、女子教育における体育・スポーツの導入です。学校では体操やテニス、ホッケーなどのスポーツが採り入れられ、少女たちは活動しやすい服装で身体を動かし、健康ばかりでなく、団体精神なども育むようになりました。

イギリスでは自転車が1890年代には広い階層に普及し、女性が一人で自由に移動できる範囲を飛躍的に広げました。当時の雑誌でも自転車は「女性の新しいエクササイズとして理想的であり、これは一時的な流行に終わるものではなく、女性解放につながるものである」と紹介され、イギリスのみならずフランスやアメリカなど欧米で広く普及しました。

下田歌子が訪れた19世紀末のイギリスでは、衣服改革や教育改革により、動きやすい服を着た女性たちがスポーツを楽しみ、自転車で自由に移動し始めていました。下田は、このように生き生きと動き回る女性たちの姿に感銘を受けたのかもしれない。帰国後下田は、帰国後下田は、日本で初めて結成された女性の自転車倶楽部「女子嗜輪会」の会長に就任します。

日本で最初に自転車に乗った女性は、後にオペラ歌手になる三浦環と言われており、着物に袴、髪に白いリボン結んで自転車通学する彼女の姿は多くの女性の憧れの的となり、日本の女性解放にも大きな役割を果たしました。自転車も衣服改革と結びつく形で、女性解放の推進力の一つとなったのです。



▲自転車が女性解放の一助となったという事実にも、興味を持った聴講者も多かったようです。





講演 女袴、セーラー服、そしてブルマ —女子学生の服装の変化が意味するもの

日本も欧米と同様に、19世紀終わりから20世紀にかけて大きな服装改革がありました。欧米と違うのは、「和服か洋服か」という大きな選択があったことでしょう。男性の場合は明治初年から洋装化が進みますが、女性の洋装化は、1920年代に入ってからです。なぜ女性の洋装化は男性に比べて大きく遅れたのか。男女の服装の変化の違いとその意味について考えました。

■洋装の始まり—鹿鳴館時代

男性の洋装化は明治初年から始まります。洋服は近代国家を支える人材のシンボルであり、軍服、制服、礼服など、公的な業務を象徴する服装として広がります。

女性の洋装化もまた、西欧との社交・外交を担う礼服として宮中から始まりました。1886(明治19)年、皇后は華族女学校の卒業式で初めてパンスル式のドレスを着用し、以後一貫して洋装で過ごしたとされます。

しかし、一般女性の服装は、紆余曲折を辿ります。明治初年、女学校が開設された際、女子学生は袴をはくことになりましたが、袴は通常士分以上の男性が着るものだったために、世間から強い批判を受けます。そのため、女子学生は着物を着用するのですが、1880年代の鹿鳴館時代には、洋服の着用が義務づけられました。すると今度は、「似合わない」などと批判が起き、下田歌子も、コルセットで締める当時の洋服を「女性の身体の発育と健康」という観点から批判しました。



講師
大井 多鶴子 教授
(実践女子大学 人間社会学部
人間社会学科)

■下田歌子の考案による女袴からセーラー服へ

とはいえ、和服にも問題がありました。広い帯や長い袖、そして裾の乱れが女性の行動を制約するからです。そこで下田が華族女学校の学生のために考案したのが「女袴」です。下田は男袴に紐と襷を増やしてスカート状にし、女性が着用しやすいように工夫しました。この女袴によって女子学生はスポーツや自転車乗りを楽しむことができるようになり、女袴は全国の女学校に広がりました。

しかし、1920年代、体育の授業が本格化し、女子の競技スポーツが行なわれるようになると、袴もまた重く不自由なものになります。そうした中、女学校の制服としてセーラー服やワンピースを採用する女学校が現れ、一気に全国に広がります。実践女学校も1923(大正12)年にセーラー服を導入しました。

ちょうどこのころ、事務員、タイピスト、電話交換手といった「職業婦人」が仕事着として洋服を着るようになります。また、ファッションとして洋服を着るモガ(モダン・ガール)も登場します。こうして、1920年代から30年代、女性の間に制服や仕事着、ファッションとして洋服が広がっていきます。

■「理想の主婦」としての和服

しかし、それでもなかなか洋服を着ない女性たちがいました。一家を切り盛りする主婦たちです。当時の理想の主婦は、和服で丸髷姿の従順でつましい女性でした。仕事から帰って和服に着替えてくつろぐ夫のために、主婦は着物姿でいる必要があったのです。

女性の洋装化の遅れには、こうした性別役割分業と主婦役割がありました。男性が着物を着なくなった今でも、着物は、「伝統的な女性らしさ」を表す女性の晴れ着として残ることになります。



▲実践の最初のセーラー服が「初めて見る画期的な水色で可愛かった」と好評でした。

講演 実践のルーツを英国に追う —ケンブリッジ大学ニューナム・コレッジ

1895年5月、下田歌子はヴィクトリア女王に拝謁し、その少し前から一般の女子コレッジを視察し始めます。前年の日清戦争で、日本の将来に危惧の念を抱き、「百年の善後策」として一般女性の教育に目をむけたのです。英国の女子コレッジで何を目的し、帰国後の実践女学校にどう活かし、その将来に何を考えたのか。歌子の足取りとともに、本学のルーツを解説いたしました。

■英国・ケンブリッジ大学における 女子教育改革

1895年、下田歌子はケンブリッジ大学初の女子学寮として創設された、ニューナム・コレッジ※(以下ニューナム)を視察しました。オックスブリッジ(オックスフォード大学とケンブリッジ大学)のコレッジが共学化する中で、現在でも女子専門を貫いている数少ない名門女子コレッジです。

比較的女性改革運動の遅れていた北部で、アン・J・クロウ(以下クロウ)とJ・バトラーが大学講義の女性への開放と女子大学の設立を促し、1869年にはヘンリー・シジック(以下シジック)等による女性対象の講義が始まりました。その後次第に大学講義の多くが教授等の特別許可を得て女性に開放されていきましたが、大学の正規メンバーでない女子学生には不利も多くありました。

そして1871年秋に、ケンブリッジ大学の女性教育にとって注目すべき出来事が起こります。シジックが女子学生にも男子と同様に住居が必要だと考え、小さな家を軒確保し、クロウを説得して初代学長とし、一期生となる5人の女子学生と住まわせました。これがニューナム・コレッジです。

当時女性には大学講義への出席や正式な試験である「トライボス」を受ける権利はありませんでしたが、非公式で受けたトライボスで好成绩を残す女子学生が出て、シジックは女性もトライボスを正式に受けられるようにすべきだと考えます。1879年から翌年にかけて、ニューナムとガートン(先行する同じケンブリッジ大学の女子コレッジ)の学生が3つのトライボスで首席を占め、女性の学力が男性より劣っているという考えを改めさせましたが、世間は強い抵抗感を表しました。1881年、嘆願書が4度目でやっと審議され、女性が正式にトライボスを受ける許可が与えられます。

とはいえ、女性に「卒業資格」がケンブリッジ大学で与えられるのは、そこからさらに半世紀以上後の1948年のことで、最初の学位授与者はエリザベス皇太后でした。

■ニューナム式とガートン式

歌子は、ニューナムとガートンがお互いそれぞれの方法で協力し合い、権利を獲得していく過程を目にします。ガートンは、男性と同様に競う正面突破型でしたが、ニューナムは、女性が得意な分野から始めることによって自信をつけさせ、徐々に実力を伸ばすというものでした。歌子はその両校の違いを知り、あえて自分の女子教育の理想と合致するニューナムを選んで訪問したのではないかと考えます。

シジックとクロウは、女子学生たちに人生の小さな喜びを見出すことを熱心に勧め、スポーツや芸術を積極的に採り入れました。また、性別や人種や国籍、貧富の差などの偏見は一切持たず、不合理な抑圧を取り除き、彼女たちの誠実な努力を助けることによって機会を与え、その結果必然的に女性の能力が認められることを待ちました。こうした精神は、ニューナムの女子学生たちに大きな影響を与えました。

歌子はこのニューナムの真髄を日本に持ち帰り、実践女学校、実践女子芸工学校を開校しました。今でもその方針は受け継がれ、様々な形で多様性を実現しています。男女の能力に関しても競うのではなく、お互いの特性を尊重し合えるような社会を、明治の時代に歌子はすでに考えていたのです。その意味において、歌子がニューナムをあえて選んで訪問した意義は、非常に大きいと思います。



▲大関先生がケンブリッジ大学客員研究員として滞在中に住んでいた家が、下田歌子が訪問した時のシジックの自宅だった、など先生ならではのエピソードが盛りだくさんの内容でした。

※日本語で「コレッジ(college)」は、「総合大学」という意味の「ユニバーシティ(university)」に対して「単科大学」という意味で使われますが、それとは異なるオックスブリッジ(オックスフォード大学とケンブリッジ大学)特有のシステムのものとして「コレッジ」と表しています。コレッジは私立で、日本で言う「学寮」に当たる共同生活を義務付けており、個人指導を特色としており、ユニバーシティの学生教員は公認コレッジのどれかに所属しなければなりません。

参加者アンケートから (抜粋)

- 「水治療」というものを知り、驚きました。身体に良さそうだと思いました。(女性・20代・本学学生)
- 欧米の女子教育改革と服装改革の歴史における、服装と自転車の導入の関係が面白かったです。(女性・70代・本学卒業生)
- 洋服や晴れ着としての和服が、どのように現在とつながっているのかわかることができて面白かったです。(女性・20代・本学学生)
- イギリス(の服装改革)における「ブルマを履く」という行為や、日本における着物や袴に対する捉え方が、イギリスでも日本でも女性と男性とは違うといったような共通性があり、大変興味深かったです。(女性・20代・本学学生)

質疑応答

- Q: 女性の和服から洋服への服装改革がなかなか進まなかったことのひとつに、洋服が高価であったという経済的理由も考えられるのではないかと?
- A: それも多分にあったと思われます。女性にとっての初めの洋装は高価なドレスですし、女子学生も、モガなどのファッションで洋服を着る人も、やはり中産階級以上だったと思われます。

